
survival • area

兎 k o u 兎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

survival・area

【NZード】

N7199Y

【作者名】

兎木のん

記憶を失った少年

日常を失った少女

……何も分からぬ

この荒んだ世界で、
失意の果てに一人は出会い、旅をする。

失った記憶を探す少年

過去へ帰る方法を探す少女

数々の思いと

多くの屍を乗り越えて

再びこの地へ集う。

「これはArea 0（ゼロ）

二人が出会い、

あの日全てが始まった。

“Area・o(ヤロ)”『プロローグ』(前書き)

読者の皆様。

こんなド素人の作品を視界に入れて頂き、そしてあるうじとか開いて頂き非常に有り難き幸せに存じ上げます。

…とまあこんな堅苦しい喋り方は苦手（笑）なのでもう少しづけていきます（・、・、△）

とりあえず僕は学生です。

健全で頭脳明晰（笑）、容姿端麗（笑）、絶体絶命（？）な模範生徒（笑）なのであまりテンポよく出来る訳では無いですが、平均2週間に一度くらいのペースで投稿したいと思います。

さてさて記念すべき第一作品である『survival・area』は

ヒロインである『如月 雪穂』が突如として地面に発生した黒い穴に落ち、未来に飛ばされ、記憶を無くした少年（主人公）に出会い旅をするという話です。

細かい内容は読んで頂ければ分かるでしょう。

それでは、

始まり始まり～（^○^）／

“Area・o(ゼロ)”, “プロローグ”

見渡す限りの荒れ地。

一台の車が砂煙をあげて走っていた。

2人の男が車の中で話している。

「本当にこれで…いいんですか？」

敬語を使い、細身で眼鏡をかけている運転手の男は大体30歳前後
だろう。

助手席に座った、がつしりした体格の50歳はあるであろう男は重
く口を開いた。

「ああ…、これが俺達の『仕事』だ。」

「…でも…上はいつも『やれ』としか言いません。
それが正しいか、
間違っているかも…
しなければならない理由も…
何も…何も教えて貰えないのに…

貴方みたいにやうつと片付ける」となんて出来ませんよ。」

細身の男はかなりの嫌味を含めて、
吐き捨てるように言った。

「……惱もうが苦しもうが最後にはやらねばならんのだ。
そうしないと矛先が自分に向かられる。
死にたくなければやるしかない。
……それだけのことだ……。」

体格のいい男は苦虫を噛み潰すよくな顔をして、軽いため息をついた。

さつきまで嫌味口調だった細身の男にもその意味は通じたらしく、
彼もまた、何も喋らなくなる。

外の景色は変わらない。

しばらくして体格のいい男が先に口を開いた。

「……でも……今回は、いつもと少し違う。
上の奴らの顔を見りやあわかるさ。
あれは何かを必死で隠そうとしている顔だった……。

……まあ……、

俺たちは所詮組織のパートだ。裏があるとわかつたところだ……大したことは出来んがな……。」「……？」

「パートはパートらしく……」の“敵”を始末しろってことですか上はそういうつたが、殺すつもつはない。少なくとも俺はな。「…………？」

「裏を暴くなんて格好いい」とは言えんが、何でもかんでも言いなりなんてのは癪だからな。」「

「随分といきなりですね。普段の貴方は何処へ行つたんですか?」

「個人的だが理由はあるぞ。

「いつが時代の流れを変える。

この血生臭い時代に何かしらの風を吹かせる……。

俺にはそんな気がしてならんのだ。

なんせ一人で……あれだけのことをしでかしたわけだからな。

「

体格のいい男はニヤリと笑つた。

「笑い」とじやないですよ。

「いつがどれだけの人を殺したと思つてゐんですか。」「

「……いつはまだ若い。

一度くらいチャンスを『』えてやつてもいいんじゃないか？」

「自分の予感なんかで命令を無視するなんて、何か悪いものでも食べましたか？」

「……相変わらずお前は『』な……。
まあただの『』まぐれや。『』にするな。」

細身の男は短くため息をついた。

わたりよりは短い沈黙の後、細身の男がすがるよつて呟いた。

「私達がして『』とは正しいんですか？……私の家族は……救われるんですか？」

「……救われる？……成程な……お前も騙された口か……。考えてもみる。こんなボロボロになつた世界で、他人を思いやる余裕があると思つか？」

「……じゃあ見捨てろと……？」

「血の繋がつた……家族を？」

「今のは少し悲観的過ぎたな。
まあこんな状況でも自分を見失わなければ、大抵のことは何とかなるだ。

それに俺たちがして『』との善悪なんて……もつ誰にもわからんよ。
そもそも基準が何処にある。」

「それでも私は……自分を正当化する口実が欲しいんです。
……今さらかもせんが。」

「そんな考へが浮かぶ時點で、お前はまだマトモだな。」

「…………。」

細身の男はハンドルを握りなおし、
何がを振り切りつとするようにアクセルを踏み込んだ。

2192年

急激なインフレによる市民の暴動が発生。これにより、政府組織と
市民のみで構成されたレジスタンスといつ二つの派閥に世界が真つ
二つに分かれた。

その後、市民を失った国の行政は完全に崩壊。

分かれた二つの派閥はこのあと200年にわたる戦争を繰り広げる。

それにより皮肉にもあらゆる技術が発展し、武器や端末等様々なものに影響を与えて多大なる進歩を遂げていた。

2385年

既に戦争の目的はお互いのHPの為では無くなっていた。

勿論理由は生き残る為。

土地、資源、技術、食料、何でも奪つて生きるのが当たり前。

そして膨大な人数を抱えていた政府組織は裏切りが多発。内乱が起こり、さらに何百もの組織に分かれた。

そして今、2463年…

別れた組織は別々の生き方を見い出し始める。

自ら食料や兵器等を作りだす者、

情報等を他の組織に売つて利益を得る者、

他の組織から奪つ者…

今でも銃などの武器を持ち歩くのが当たり前という、生き抜く為の暗黙のルールは変わっていない。

この一人もそれぞれ武器を装備している。

細身の男は腰に散弾銃、“ベネリM4”を、

がっしりした男は突撃銃、“M4カービン”（オプション・消音器、レーザーサイト）を2つ背中に担いでいた。

今の基準では、これでも割と軽装備だ。

細身の男は腰に散弾銃、“ベネリM4”を、

“ベネリM4”を、

“ベネリM4”を、

がつしりした男は突撃銃、“M4カービン”（オプション・消音器、レーザーサイト）を2つ背中に抱いでいた。

今の基準では、これでも割と軽装備だ。

無言のまま一時間が過ぎ、目的の場所に到着。

体格のいい男は車から降りた。

暗くて遠くまでは見えないが少なくとも人の通りのところではない。

細身の男は運転席に座ったまま、左手を低めに前に出し、人差し指と中指を揃えて左に20cm程動かした。

空中に青い光のラインが浮かびあがる。

左に動かした左手をそのまま弾くようにすると、空中に立体映像のウインドウが表示された。

“ホログラフィー・パーソナル・モバイル”通称『HPM』見た目は腕時計のようだが、装着している腕を動かすとそれが起動の合図となり、ホログラフ（立体映像）を利用した端末の画面が空中に表示される。

アップデートはプログラムメモリーさえあれば可能。

個人で特別なプログラムを開発しているものもいるので「コピーさせて貰えば、「コピーした方の端末でも使えるようになる。」

余談だがプログラムを作るプログラムはデフォルトで入っている。

その画面を操作することにより、メール、電話、その他諸々の便利機能が使える。

便利機能の例として物質転送を利用した格納機能が搭載されているため、多大な量の武器等を持ち運ぶことが可能。

しかしこれには、デメリットがある。

出現させるのに時間がかかるのだ。

そのためＨＰＭを使用する人は皆、戦闘に使う武器はホルダー等に入れて直接装備している。

ちなみに試作段階終了が半年前なので持つてない人も多い。

ＨＰＭ開発前までは端末の形状は携帯電話と同じ形だったため携帯電話を未だに使っている人は珍しくない。

リストタイプじゃなくて手に直接チップを埋め込むタイプも非公式に開発されたが開発した組織が開発の2日後に壊滅したため、世界中に6つしかそのチップはない。

チップの存在を知る者はほとんどないし、壊滅の理由を知る者は、

さらに少數。

少なくともこの二人はどちらも知らない。

細身の男はホロキー（ホログラフ・キーボード）を叩いて報告書をまとめ始めた。

体格のいい先輩口調の男は大きく細長い、全長2mのバックを担ぎ上げ、歩いて行つた。

「（自分を見失うな）…か…。」

細身の男は一人呟いた。

“Area・o(ロロ)”, “プロローグ”(後書き)

いかがだったでしょうか

HPMは今の世界でいつケータイのよつなものですね。

皆気軽に出します

バンバン出します。

ホロキー打ちまくります。

それはさておき、

1話は主人公が出てきます。

ヒロイシヤン田淵ての人はもつ少し指をくわえて見ていくべきださっこ(キ
リッ)

それではまた次回。

お楽しみに〜

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7199y/>

survival・area

2011年11月21日16時31分発行